

陸自駐屯地紹介シリーズ 第48回

故郷を守る 弘前駐屯地

第39普通科連隊他

駐屯地シリーズ編纂委員会

はじめに

このシリーズに携わって、靖國偕行文庫からあれこれの所蔵書籍を借り出し紐解いている。中に輝かしい戦績があった。後述の騎兵第8聯隊の挺身行動である。読むうちに、その部隊の兵営があった弘前を取材したい願いを持つようになった。

日露戦役において弘前の陸軍第8師団が黒溝台で直面した戦いは、帰趨によつては日本がロシアの植民地転落に瀕する局面であった。一説によればこの会戦当初での我が高等統帥は必ずしも満点ではなく、総司令部はロシア第2軍司令官グリッペンベルグ大将の企てた約10コ師団の南下大攻勢の企図も規模をも見過ごし、中核であった第8師団は、戦闘参加人員の33・2%が死傷する大損害を被りながら獅子奮迅の粘りがあったことが伝えられている。この粘り強さを發揮したことを以て第8師団は「国宝師団」を名乗るようになった由である。

青森県概説

青森県はいまでもなく本州北端の県であり、北海道に対峙している。県は下北、南部、津軽に区分され、東の下北半島と西の津軽半島が陸奥湾を抱く。著名地を上げてみよう。下北には、海上自衛隊の大湊基地、「マグロの本約り」で有名な大間漁港、冥界の人の心を聞く「イタコ」で名高い恐山、明日の日本のエネルギー開拓の拠点原子力開発施設などがある。南東部には日本有数の漁港と陸上自衛隊駐屯地や海上自衛隊基地のある八戸市、航空自衛隊及び在日米空軍の基地三沢があり、県南秋田県との境界上に十和田湖、その北に明治陸軍史痛恨の「雪中遭難」の八甲田山、十和田湖から津軽に入り

県境を西に辿ると世界遺産に登録された白神山、津軽富士の別名を持つ岩木山、十三湖、津軽半島北端で青函トンネル本州側の入り口竜飛崎、また桜が美しい弘前や五所川原、更には大宰治の生地として名が売られている金木町

等がある。夏の祭典「青森ねぶた」及び「弘前ねぶた」には毎年3百万人を超える観光客が訪れる。

青森県人の気質は無口で忍耐強く、「じょっぱり」と云う言葉が使われている。口数は少ないが黙々と白分がやるべきことを果たす気質とでも形容できようか。艱難辛苦にじつと耐えて自分を捨てないという意味が含まれ、青森県人、特に津軽の人々が自らを「じょっぱり」と呼ぶことに誇りが込められていることを感じた。

弘前駐屯地

県庁所在青森市の南西約10kmに青森空港がある。そこから連絡バスで約1時間の奥羽本線途上に弘前市がある。

陸上自衛隊弘前駐屯地は弘前駅南西約6km、弘前市大字原ヶ平字山中に所在している。字の名が示すとおり、りんご園に囲まれ東に八甲田連

峰、西に岩木山を眺望し、北に弘前市街を見下ろす自然に恵まれた環境にある。この地はかつての陸軍第8師団射撃場跡地で、昭和43年3月八戸市から第39普通科連隊他が移駐して駐屯地が開設された。



名峰お岩木山麓にある弘前駐屯地

隊員は約80%が青森県出身者、その他も殆ど東北出身者で占められ郷土色が強く、質実剛健、陸軍第8師団の伝統と誇りを受け継いでいる。

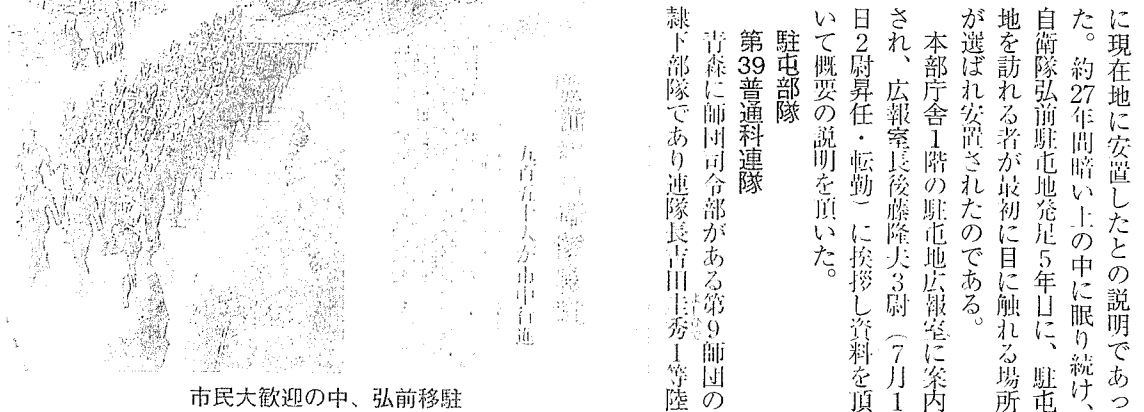
弘前駅から駐屯地へのバスの便はあまり良くない。タクシード約15分の走行後、駐屯地正門前に着いた。當門の道路向かい側には看板を下ろしてから久しいのであろう商店跡がまず目を引いた。

一方駐屯地側を見ると鮮明な褐色の門柱が立ち、中の右手に警衛所、その奥に門柱と階段と松の植え込みが見える。警衛所から右斜めに曲がった緩い上り坂の道路沿い左手

にはグラウンドと桜並木、右手には隊舎が並んでいる。警衛所で広報室からの迎えを待った。現れたのは内山2曹という女性自衛官、

先ほど目についた植え込みの前で説明を受けた。昭和天皇御弟宮の秩父宮殿下がご在隊された記念碑だという。この碑は終戦直後、米軍の破壊命令を予測し防空壕の中に深く埋蔵してあったものを昭和47年に発掘し、48年に歩兵第31聯隊門柱と共に

に現在地に安置したとの説明であった。約27年間暗い上の中に眠り続け、自衛隊弘前駐屯地発足5年目に、駐屯地を訪れる者が最初に目に触れる場所が選ばれ安置されたのである。



市民大歓迎の中、弘前移駐

本部庁舎1階の駐屯地広報室に案内され、広報室長後藤隆夫3尉（7月1日2尉昇任・転勤）に挨拶し資料を頂いて概要の説明を頂いた。

駐屯部隊
第39普通科連隊

青森に師団司令部がある第9師団の隷下部隊であり連隊長吉田圭秀1等陸

五百五十八人中中口連

佐陸自86は駐屯地司令を兼務している。連隊は昭和37年8月18日に八戸で創隊されたが、創隊と時を同じくして弘前市議会では自衛隊誘致審議を開始していたことから、いずれ弘前移駐が予測されていたらしい。創隊3年後の昭和40年7月には弘前移駐を決定し昭和43年3月25日に移駐完了している。この時同時に移駐したのは第9偵察隊、公計隊、警務隊派遣隊等である。

移駐要望に応えて、43年5月19日の駐屯地開庁式の4日後にはリングゴの受粉協力開始、時期を同じくして十勝沖地震の影響で破壊した十和田市高清水の用水路復旧作業、同年10月大館市大火の災害派遣、同じ月に大鰐スキー場整備協力開始等、実に多忙な移駐初年度を過ごしている。

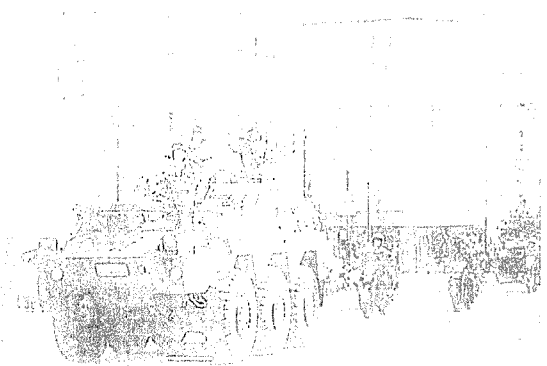
当時は安保改定を控えて地域によっては反自衛隊感情の激しかった頃であるが、当地にはそんな不快さは微塵も無かった。昭和47年8月には当時幻の国道と呼ばれていた国道39号線の工事支援を開始したがこの支援は貫通式まで実に11年続いたのである。忍耐強いという他はない。

その他阪神淡路大震災災害派遣、ゴラン高原PKOへの隊員派遣、イラク復興支援隊派遣など目覚ましい活躍を重ねてきたが、連隊が本来の国防任務に備えを重ねつづけたことは勿論であ

る。それは担任区域の津軽が持つ戦略上の重要性であるからだが、その全貌の詮索は避けたい。

第9偵察隊

オートバイ、装甲偵察車を装備して師団の偵察、警戒、掩護を任務とする部隊で、隊長は柳田孝臣2佐である。基本任務は師団全般にかかることであるから、平素の地形研究偵察は津軽半島の上に留まらない。



師団の耳目 偵察隊

弘前駐屯地業務隊

部隊創設は駐屯地開設から約6年後である。現在の業務隊長は瀧崎勝2佐で駐屯部隊の総務、管理、厚生、衛生、補給業務の支援を実施する他、弘前演習場の管理も担当している。

第305基地通信中隊弘前派遣隊

駐屯地電話交換業務、自衛隊通信回線の端末を維持運営する部隊で隊長伊佐治史嗣3尉の下、日夜分かたぬ業務に従事している。

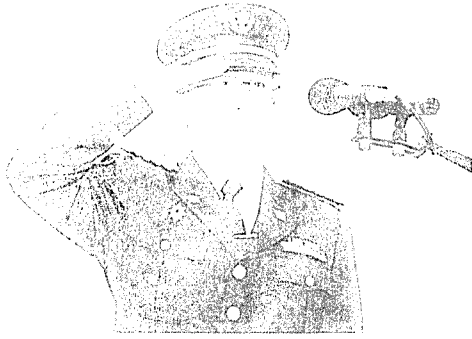
第427会計隊

駐屯地の契約・出納を担当する部隊で隊長は吉崎安伸1尉である。

この他に警務隊弘前派遣班、弘前地区援護センター等がある。

司令表徴

最近駐屯地を取材する毎回に有り難く且つ恐縮するのは、駐屯地司令に時間を取って頂けることである。必ずしも時間的余裕があまりになる場合はかりではなく、多忙極まりない中のこともあり恐縮するが、借行社へのご配慮



吉田駐屯地司令

としてご好意をそのまま頂いている次第である。

今回の表徴は司令と差し向かいで部隊食を頂戴する形で用意して頂いた。食事しながらフランクに話して頂けるということであろうと感激して、弘前赴任の印象を伺った。「隊員の純粋さとねばり強さです」。箸をとめた駐屯地司令の表情に真剣さが込められて、東北部隊在勤経験者の筆者には十分頷けるところであった。司令は時々隊員に云われるそうである。「君らはその美点をもっと主張した方が良い。だが「そんなこと当たり前でしょう」と、まるで反応はないそうである。

「駐屯地に寄せられる支援には陸軍

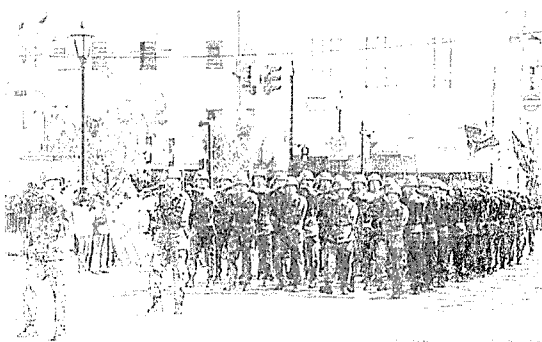


弘前城公園での記念式典

第8師団以来の歴史を感じます。有り難いことです。司令から伺うと、この駐屯地では全国に例の無い方法で自衛隊創立記念日を祝っている由である。近年自衛隊に対する理解も深まり、市街地の目抜き通りで観閲行進が行われることも珍しくなくなったが、自衛隊に対する謂われなき風当たりの激しかった安保騒動の時期から、この駐屯地は記念式典、観閲行進、記念祝賀会食を弘前城公園内で行い続けているという。快事である。弘前城は弘前市民ばかりでなく、津軽人、青森県人全体の誇りで、純白に輝く雪が天守にかかる冬の弘前城、桜が咲き誇る春の弘前城の美しさは、遠く異郷に活躍する青森県人も含めて心の拠り所で、一種聖域ですらある。その聖域弘前城で記念行事全てを行い得たということは、弘前市民のみならず近隣市町村民の暖かい支持があるゆえであろう。

更に昨年の観閲行進においては特記すべき事項があった。観閲部隊指揮官副連隊長橋本光也2佐の前に先頭を進出したのは、隊友会員三三智彦氏陸自58が指揮する隊友会員集団であったと伺った。行進位置には意味が込められていた。「部隊が今日あるのは、先輩がたのお陰、節目の年の記念日に先頭を行進して頂き、敬意を捧げる」先輩がたとは、参加出来なかった「全て

の先輩自衛官」を意味したのであろう。隊友会員は「益々厳しい情勢の中で国防を全うしてくれ」と祈りを込めて観閲官に敬礼し、観閲官の司令は「確かに引き受けました」と通過する先輩方の汗と涙の成果に対して答礼されたと思考した。



市街地行進

取材を終えて駐屯地に別れを告げたあとのことであるが、筆者は弘前城に向かい古木の陰を歩きながら式典当日の姿を想像して気付いた。この城内には青森県護国神社が鎮座し県内戦死者の御霊が鎮まっておられる。式典当日は神殿の奥から現代の防人達の固守への決意と励みを見守り加護を垂れ賜うたのではあるまいか。



津軽のシンボル「弘前城」

連隊長統率方針：日本一頼りになる連隊の錬成。連隊長要望事項 隊員に対して：志は高く、想いは熱く。部隊に対して：即動、強靱を掲げておられる。更に連隊長の考えに踏み込んでお尋ねした。答えは現場にある。正面突破「我々はこの郷土を絶対に護り抜かなければならない。私はその先頭に立つ」。北のミサイルの企みが一段落したあと先ず弘前城天守閣に登られた由である。おりから日暮れ時、入り口が岩木山の陰に沈みかけ辺り一面あかね色に染まり美しさは息を飲むほどであったらしい。その時のもう一つの感慨「故郷を護る。これが国防の基本」を隊員にも説いているとのことである。読者にお伝えしたい。この連隊長兼駐屯地司令吉田圭秀^{よひで}1佐は、平成20年3月号の本誌に登場しておられる。「陸自幹部候補生学校を語る」という

解説対談で、東大出身の吉田1佐は陸上幕僚監部防衛部防衛課業務計画班長として参加され、司会の編集委員長の「東大出の」吉田さんはなぜ自衛隊に入られたのですか。そして久留米の厳しいと聞く訓練に(当節の一般大学出が)なぜ耐えられたのですか」という些か失礼な質問に対して「私は大学時代に民間よりも国の仕事、公務員になりたい。それも性分として現場が良い。冷戦時代で安全保障ということに関心がありましたので、自衛隊は現場中の現場ですから」と答えられた。今回、右に書いたように見事な武人の連隊長を拝見して、素志を貫いておられるなと、衷心から感銘したのであった。司令は偕行社のことを極めて良く知っておられた。

軍都弘前と絆

陸軍時代、兵役は全ての男子の義務であった。軍と地域住民が別にあるのではなく、軍隊は地域男性が必ず通り過ぎなければならぬ人生の通過過程であった。その過程で人々は汗を流し血を流し命を捧げたのである。それは国のため、郷土のためであり、ひいては地域に生きる自らのためであると認識し納得していたに違いない。そうでなければ敗戦後の国家意識の荒廃した中で、ただ1県青森県だけが「護国神社」の名を続けられなかったであろう。

駐屯地もまた地域の人々との交流に力を注いでいる。例を並べてみよう。地域最大のイベント「ねぶた祭」に多くの隊員が参加しているほか、数多くの地域参加をしている。変わったところでは地域住民の駐屯地のクラブ活動参加である。駐屯地には陶芸クラブ(指導者・上佐勝廣1曹)がある。このクラブに近所の少年少女が参加して好評とのことで、手作りの作陶棟の中に棚一杯並んだ乾燥中の作品があった。素材でほのほとした出来上がりで、完成した作品を祖父母に贈っている姿が目につく。協力会も市町村毎に組織を固め、区域担当中隊と絆を固めている資料があった。

語り部の品々 伝えられる歴史

駐屯地防衛館という名の資料展示館があった。多くの貴重な展示品があり、時間があれば一つ一つ時間をかけて拝見したい展示物ばかりであった。代表的なものを紹介したい。

秩父宮殿下ご在隊記念のお写真

ご在隊記念碑は冒頭に記述したとおりであるが、防衛館にも記念のお写真があった。軍服に身を固め背筋を伸ばした乗馬斜め前からの姿勢である。気が溢れていた。また野外訓練の途次であろうか、あぐら姿で同じ姿勢のお付武官とにこやかに談笑されているお姿もある。ご日常の和やかなお人柄が

拝察された。さらに昭和52年10月26日駐屯地にご台臨になった秩父宮妃殿下の教枚のお写真があり、ご表情には亡くなられた殿下を懐かしむかのようなご表情に充ちていた。

第8師団司令部を偲ぶ品々

陸軍第8師団司令部に關係する品が展示された一角があった。先ず壁の上部に大正4年、弘前付近で行われた陸軍大演習参加将校の集合写真があった。また大本營の板看板があった。陛下が大演習で行幸されればその地は大本營になるのだと知った。立見將軍の像が2体、掛け軸があった。栗色の階段は輝く程に磨き立てられていた。雰囲気には品格があり、当時の師団司令部の占める地位の高さが伺えた。これらを敗戦の激動を超えて残した陰の努



ご在隊記念碑

力を忘れてはなるまい。

第31聯隊雪中行軍成功の記録

明治陸軍痛恨の「八甲山遭難事件」は広く知られるところである。しかし全く同じ時期約1コ小隊で逆経路を辿った歩兵第31聯隊が一兵も失わず成功したことは、記念館では僅か1枚の写真で伝えられるのみである。ゆかしではないか。

第8騎兵聯隊を偲ぶ品々

筆者が現物を拝観したいと焦がれている展示品群があった。騎兵第8聯隊を偲ぶコーナーである。騎兵第8聯隊については大方良くご存知かとは思いますが割愛するに忍びない。聯隊長水沼秀文中佐士官生徒8期の指揮の下、奉天会戦を前にして大きく内蒙古沙漠地帯を34日かけ迂回して敵の後方長春南方まで進出し、紀元節の日に東清鉄道新開河の鉄橋を爆破したばかりでなく、爆破成功後、任務をほぼ達成した挺身隊は、世界に名高いコサック騎兵を擁するロシア兵の3倍の勢力に遭遇して、「逃げる」ことを選ばず、乾坤一擲の乗馬襲撃を挑み潰走させた。島貫重節氏45期の『ああ永沼挺身隊』下巻冒頭にはこの挺身隊の姿が活写されている。多大な損害があったが乗馬襲撃戦に勝利を収めた。

航空機も装甲車も無い時代の騎兵は軍の耳目として捜索に重用されたけれ

ども、騎兵戦團の本領は、「襲へー」の号令一下、長剣を焔めかし人馬一体殺到する乗馬襲撃であった。「ブレドー旅団の襲撃」なるプロシヤ騎兵の奮戦を歌った軍歌が陸軍軍人の愛唱するところであったと聞くが、育成の日も浅く兵力の不足もあり騎兵の父秋山將軍が心ならずも下馬戦團を主に指導しておられた本心の夢を、弟子の水沼聯隊長が実現したのである。この戦團は騎兵の本場の欧州で注目され、ドイツで実景を想像した戦場名画が生まれ「月下襲撃図」の名で後世に伝わったのである。



月下の乗馬襲撃図

挺身隊の戦果は大きかった。第一にロシア軍のヨーロッパからの兵力増

強、兵站補給の連絡線を遮断したこと、第二にロシア軍が騎兵集団などを挺身隊捕提に使ったため我が軍の後方の脅威を軽減したこと、第三にロシア軍総司令官クロバトキンの作戦指揮を消極的たらしめ、我が奉天会戦勝利に多大な貢献をした。挺身隊は帰途にも2カ所の鉄道線路爆破を実施している。帰還途75日、挺身行動2千kmに及ぶ。

展示は幅額、永沼秀文中佐の写真、左に第8騎兵聯隊正門写真、右に月下の乗馬襲撃図の絵画、3段目中央に襲撃戦で戦死された浅野力太郎大尉(期)の乗馬像があった。愛馬さえも両前足を高く上げ敵を蹄にかけようとする姿勢を取り、大尉は刀を振るい固む歩兵を切り捨てている勇姿であった。筆者は目の底に焼き付けんものと暫く凝視していたが、何時しか『ああ永沼挺身隊』の記述を思い起こしていた。著者島貫重節氏描く所の永沼聯隊長は正6年、中将で退官されたが、功3級の年金を挺身行の戦死者家族、負傷者の為に、また墓参、戦績巡拝に使われたという。また島貫氏は執筆のためにこの存命の聯隊員や遺族を訪ねられたが、どこでも永沼將軍に対する敬仰の心に接したと述べるかの如き筆運びがあった。

史蹟 偕行社

市内、弘前女子厚生学院校内に県の重要文化財に指定された「偕行社」が

ある。明治40年に、陸軍将校の親睦厚生のために立てられた930平方メートル平屋建てイタリア式の会館である。筆者が訪れた時は既に17時過ぎ、窓から暗い室内を覗き込むばかりであった。

終わりに 感謝

司令及び広報室長後藤2尉には取材に関して多大のお世話になった。ぜひ付け加えたいことがある。以上の原稿を駐屯地広報にFAXして校閲をお願いした。翌朝広報室長から結構ですと電話を頂いた。当時司令は演習場におられたが、残留の広報室長からの電話連絡に「それで良い」と回答するように」と指示があったの即答であった。その反応の早さに、万事即応の陸自の姿勢を見る思いがした。また今回も先輩編集委員大東信祐氏陸自前からご指導を得た。

文責 松村順(延陸自64)